

日中開戦8

佐世保要塞

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

地 挿
図 画
平 安
面 田
惑 忠
星 幸

目次

プロローグ	15
第一章 俵ヶ浦半島	26
第二章 海軍部隊	42
第三章 ヘリボーン	72
第四章 進め！ 撃て！ 倒せ！	99
第五章 神舟作戦	126
第六章 二人の英雄	151
第七章 バイパスの攻防	178
第八章 停戦	207
エピローグ	229

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

ど もんこうへい
土門康平 二佐。ようやく傍若無人の上司、同期と離れ、心機一転するつもりだったが？ コードネーム：モンブラン。

原田小隊

はらだ たくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお
待田晴郎 二曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずの ともお
水野智雄 二曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐしん た
田口苾太 三曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひ が ひろみ
比嘉博実 士長。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまい き
吾妻大樹 士長。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

姜小隊

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしげらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 二曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

い い かける
井伊翔 二曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

あねこう じ きねあつ
姉小路実篤 三曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：

ボーンズ。

ゆ ら しん じ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

あかばねたく ま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

お だ ぎりしやう
小田桐将 一士。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あ び る あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊〉

なかむらひろおみ
中村弘臣 一佐。西方普連を率いる。

し ば ひかる
司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官に異動となった。

おおきこかつひろ
大迫勝弘 二佐。副連隊長。鹿児島県出身で、地元の私大から自衛隊に入った。

くわ た かい と
鋤田海人 三佐。第二中隊情報幕僚。〈歩兵第一三連隊〉鋤田義人の長男。

きんじやうさとる
金城哲 一尉。偵察班を率いる。一般大から自衛隊に入り、たちまちレンジャー資格を取った沖縄県人。コードネーム：クイナ。

〈陸上自衛隊第1師団隷下〉

あ か しくにまさ
明石邦正 一尉。第一戦車大隊第一中隊。小隊は、オベロン小隊。指揮車は“ライサンダー”。

〈陸上自衛隊第一空挺団〉

すず き かつとし
鈴木勝俊 一尉。第二普通科大隊第五中隊本部中隊情報小隊を率いる。もともとは空挺教育隊の教官。大聖、聖也兄弟の父親。

〈第一二普通連隊〉

た なべしん ぞ
田辺慎吾 二尉。工学部出身の二五歳。小隊を任されたばかり。

うしじましげ き
牛島茂樹 一曹。小隊長のお守り役。「シゲさん」と呼ばれ慕われている。

〈第八戦車大隊大隊本部付き情報小隊〉

くわ た りくと
鋤田陸人 一尉。第一三連隊の鋤田義人元一曹の次男。

〈女性自衛官教育隊〉

とう け ま や
東家麻耶 三佐。元工学部の学生で、第一希望は当時の宇宙開発事業団だった。

〈特科教導隊第五中隊〉

とみながはる き
富永治樹 二佐。MLRS多連装ロケット・システムを指揮。指揮下にはGMLRSの一個大隊がある。

〈第八後方支援連隊（北熊本駐屯地）〉

いづの あづみ
伊津野杏純 一尉。普段は災害派遣で、被災者に野外入浴セットで風呂を提供する仕事をしている。コールサイン：ガールズ・ワン。

きよさき くみ
清崎久美 二曹。操縦士。

いづの の あ
伊津野乃亜 三曹。砲手。伊津野杏純一尉の妹。

まつふね み か
松舟海香 三曹。弾薬手。

〔海上自衛隊〕

第一航空群

その たろう
曾野太郎 海将補。第一航空群司令。

わかすぎしゅう
若杉秀 一佐。作戦幕僚。

わこう え み
若生詠美 三佐。情報幕僚。生まれも育ちも鹿屋。父親はP — 3C乗り。娘も防大に入りP — 3C乗りになった。

〔航空自衛隊〕

みやた ひろゆき
宮田弘幸 空将補。航空自衛隊第五航空団司令。垂水出身で、鹿屋の高校に通って防大に入る。池辺真とは幼なじみ。

いけ べまこと
池辺真 空曹長。要撃管制官。

〔陸上幕僚監部〕

あしはらよしみち
芦原義道 陸将。陸上幕僚監部幕僚副長。

やまぐちいさ み
山口諫実 二佐。装備部需品課。一般大卒の経理畑。福江島出身。

〔海上幕僚監部〕

よないはる お
米納晴郎 海将。海上幕僚長。

《内閣》

あ そう しろう きし べしんの すけ
阿相士郎 副総理兼財務大臣だったが、岸部真之輔が総理を辞任後に新総理となった。音無に促されて、サイレント・コアの設立に関わっている。

ごん だ ひとし
権田均 警視正。総理秘書官。

か どうしやうへい
加藤昇平 官房副長官。警察庁出身。

う ごん きみはる
右近公春 内閣官房。

《外務省》

くしだふみお
櫛田史雄 外務大臣。

いしかわしのぶ
石川恕 中国課長。

《警察庁》

おおいずみなぶ
大泉学 警視監。警察庁次長。

かあいてつや
河相鉄也 警視正。国家安全保障局に派遣中。右近公春とは学生時代からの付き合い。

ばばけいじ
馬場啓治 警視。長崎県警本部管理官。

きさはらけいすけ
笹原啓介 警部補。警視庁特殊急襲部隊副隊長。

みきたにけい
三木谷啓 警部補。特殊犯捜査第二係。人質交渉人。

《熊本県》

うらしまむつみ
浦島睦実 熊本県知事。農協職員として渡米中に学問に目覚め、ハーバードで博士号を取り帰国した変わり者。

《歩兵第一三連隊》

いせりそうた
井芹奏汰 陸将。陸上自衛隊元幕僚長。

むらまつけいすけ
村松啓介 陸将。井芹から幕僚長に任命される。

くわたよしひと
鋤田義人 元一曹。連隊本部付き情報小隊の分隊長。水俣出身。子供は二人とも自衛隊員。

《福岡県》

おがわひろし
緒川博 福岡県知事。元内閣広報官。

《鹿児島》

ありむらたいぞう
有村泰蔵 鹿児島県知事。戦闘機パイロットになりたくて、防衛大学校に入った。警戒隊出身。

たにかわしんじ
谷川真治 元一尉で秘書課に所属。

《歩兵第二二七連隊》

ひだかひろし
日高博 陸将。中央即応集団司令官、また北海道で普通科部隊の連隊長を務めていた。

にいどめはやと
新留隼人 元陸将補。幕僚長。

いちまるたくや
市丸卓也 元一佐。歩兵第二二七連隊第二中隊を指揮する。

つまがりむつき
津曲睦己 元二佐。

くぼぞのけいぞう
窪園啓蔵 元曹長。市丸がもっとも信頼している下士官。

中国

[政治委員]

ファンチエンチオン

方 建 中 少将。戴志強中将とは子供の受験で確執があった。

タオチンチエン

陶 景 臣 大佐。政治委員補佐。南海艦隊から異動してきたばかり。

《海軍》

[東海艦隊司令部]

タイチイアプ

戴 志 強 中将。東海艦隊司令官。清廉潔白な人物。

スンレンション

孫潤生 少将。東海艦隊参謀長。艦隊ナンバー 3。

カンウエンホア

康 文 華 大佐。東海艦隊情報参謀。

シュイチオンビン

徐 正 平 大佐。作戦参謀。

[陸戦先鋒第 44 旅団]

クッチイアプ

顧 家 強 大佐。旅団長。

ソンチイミン

宋啓明 中佐。陸戦先鋒第 44 旅団・旅団司令部付き中隊を率いる。

ルオティエンユイ

羅 天 宇 六級士官。下士官を束ねる。

《陸軍》

[第 16 空挺軍団]

トゥンシン

杜永新 大佐。第 16 空挺軍団第 1 4 5 空挺連隊を率いる。

シャオイエンチュ

邵 彦 祖 中佐。副連隊長兼政治将校。

スンリイリ

孫麗麗 中佐。作戦参謀。事実上のナンバー 2。司馬光二佐の因縁の相手。

リュチイエンフイ

盧 釗 飛 中佐。連隊情報参謀。

イエンシュエハイ

嚴 学 海 少佐。第一中隊を率いる。

旅団付き攻撃ヘリ部隊

タンチュン

唐 君 中佐。飛行中隊を率いる。杜永新大佐とは、過去何度か演習で一緒に組んだことがある。

ツワンハオティエン

曾 昊 天 大尉。連隊本部付き偵察小隊を率いる。

リュイユイタン

呂 語 堂 中尉。Z — 19 攻撃ヘリコプター“黒旋風”後席操縦士。

ウェイムウチン

韋 慕 青 少尉。編隊に参加した兵士で唯一の女性パイロット。

モオリイチワン

莫立城 三級士官。

〔第七戦術機動師団〕

ホヴレイ
何雷 少将。第七戦術機動師団を率いる。

チイアンチュウオ
江 卓 大佐。参謀長。

チュウチン
朱琴 中尉。大学出の女士官で、通訳を担当する。

《空軍》

パイウエイトン
白衛東 空軍中將。中国空軍九州軍管区司令官。

ロンホイ
龍輝 中佐。

〔空挺〕

ワンウエンファン
汪文思 大尉。一個歩兵小隊を率いる。ユイファン余凡 中尉と行動を共にして
“解放軍の英傑”と言われている。

クウオイーファン
郭一凡 中尉。小隊副指揮官。

チュウチツンハオ
周正豪 伍長。分隊長。

ハントン
韓童 曹長。小隊のベテラン。

ユイファン
余凡 中尉。対空自走砲を率いてきた。捕虜になったが“解放軍の
ほま譽れ”と言われている。

////アメリカ////

〈海軍第七艦隊〉

ロバート・B・ワイズナー 司令官。海軍大将。アメリカ太平洋軍司令官。日本人の血が入っている。

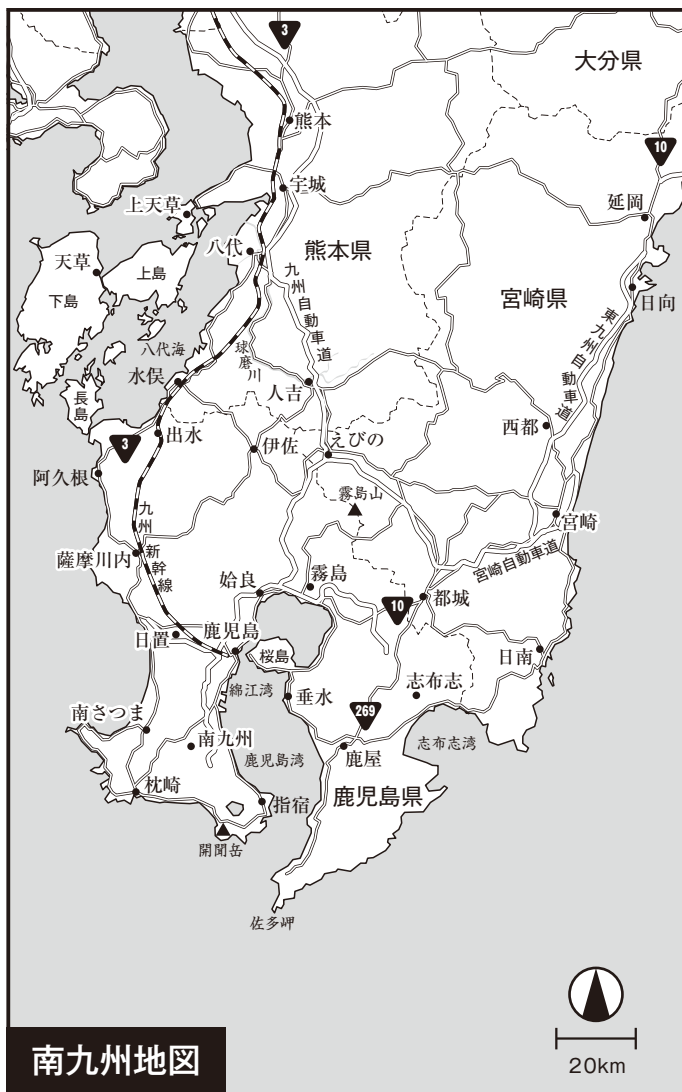
サミュエル・シド 大尉。副官。

クリスティン・スールー 大佐。“グリーン・ベイ”艦長。身長一六五センチの女性。

ダグラス・ガーバー 中佐。副長。

エンリケ・ロドリゲス 最上級曹長。

コリン・サマーズ 中佐。海兵隊の一個中隊を率いて乗り込んできた。



北九州地図



日中開戦8

佐世保要塞

プロローグ

とうきょうとわくたま
東京都奥多摩——。

第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、サイレント・コアの訓練小隊を乗せたCH-47大型ヘリは、しばらく中央線沿いに飛んだ後、多摩川の上流へとコースを取った。

眼下には川沿いに四一一号線が走り、集落の灯りが点々としている。

CH-47は、切り拓かれた山の頂^{いたadaki}にある牧草地に着陸した。そこに灯りはなく、ヘリも、いかなるライトを灯すことなく着陸した。

訓練小隊を率いてきた部隊長の土門康平^{どもんこうへい}二佐は、四眼の暗視ゴーグルを装着し、ぎこちない新人隊

員らの動きを見守っていた。

土門が最後にヘリの後部ランプドアから降りると、CH-47は、後続の警視庁ヘリにランディング・ゾーンを譲るため、いったん離陸する。

戦闘が想定されているわけではない。実弾は持たせたが、マガジンの装着は認めなかった。

普段は地域住民のゲートボール場として使われているらしく、下の取り付け道路まで、木道が整備してあった。

「バディの隊形を崩^{くず}さず、前をせつつかずに進め！」

事前の情報では、道路は麓^{ふもと}で封鎖^{ふうさ}されている

とのことだ。迂回路^{うかいちう}は無くはないが、この先にあるのはダムとキャンプ場だ。そのため、この時期、この時間帯にわざわざここに来る車がいるとは思えない。

道路に出ても、街灯はひとつもなく、真っ暗闇だ。

ここにいる者たちは、新人隊員とはいっても全員レンジャー資格と空挺の資格も持っている、最低でも任期二度目の隊員たちだ。動きは、それなりに様になっている。

ここから二キロを警戒しながら集落がある方向へと下るのが、これは良い訓練になるだろうと土門は思った。

しばらくすると、警視庁のアグスタ・ヘリが上空を通過して着陸態勢に入った。

迎えのパトカーが二台、麓から上がってくる。ヘッドライトに気付いた斥候から、退避の合図が

送られた。

全員が一斉にガードレールの下、谷側へと飛び込む。別に隠れる必要はなかったが、これも訓練のうちだ。

土門も、同じように谷側へと隠れた。斜度^{しゃど}がきつくて、まともな足場がない。ガードレールの支柱^{つちか}を掴み、どうにか身体を支える。

現場から遠ざかっていたせいで、センスも体力も落ちていたようだ。

「やれやれ……」とぼやきながら道路へと上がる。目指す藁葺^{わらぶ}き小屋風の別荘は、川沿いの道路から三〇メートルほど崖下へ降りた場所にあった。

路上には、その辺りには不釣り^{ふづり}合いな駐車スペースが設けられている。車十台は楽に止められそうなスペースが確保されており、そこにはすでに地元署の原付が一台止まっていた。

「……斥候役は、もう一分程早く合図を出さなき



や駄目だぞ。一個小隊が路上から全員退避するのには時間がかかる。尾根の向こうで、ヘッドライトの反射が見えただろう」

土門は、訓練小隊を率いる甘利宏あまりひろし一曹へ向けそうばやくと、続いて一帯を封鎖し、部下を警戒配置に就かせるよう命じた。そして、つづら折りの小径を暗視ゴーグルで見降ろす。

LEDライトの照明が、数メートル置きに頭上に張ってある。

いったいどうやってこんな崖下に家を建てたのかと、首を傾げるような急斜面にその別荘は建っていた。真下からは、溪流けいりゅうのせせらぎが聞こえてくる。

政治家の別荘が建つ場所としては、あまりに不便な場所だ。東京都内とはいえ、軽井沢かるいざわの方が遥かに交通の便がいいだろうに。

小径を降り、玄関の木戸口で待っていると、警

視庁のアグスタ・ヘリで駆け付けた三人の男たちが、二台のパトカーから降りてくるのがわかった。土門は一行が到着するまでの間に、家屋の電源周りを確認して回る。室内に灯りは無い。

警視庁公安部のベテラン、久嶋颯太ひさしまそうた警部を先頭に、国家安全保障局の河相鉄也かあいてつや警視正、内閣官房の右近公春うこんきはると続いていた。

「本当に、警官は一人しかないの？」と右近の声が聞こえてくる。

「問題は、何人の口を塞ふさげばいいかでしようね」二人より年上だが、階級は下の久嶋がそう応じていた。

土門は、面識のある二人へ向けて軽く敬礼する。「やっぱりお宅は戦闘服の方が似合うね」それを見た久嶋が、軽口を叩いた。

「家の中には、入った？」

「いえ、まだです。一応、電源回りのトラップは

確認しました。電気を点けた途端にドカン！と
いうことはないでしょう」

玄関の引き戸を開けると、土間で制服警官が一人待っていた。直立不動で一行に敬礼している。

土門が、小脇に抱えたビニールシートを部屋の奥へと広げ、さらに靴を覆うためのビニール・カバーを全員に履かせた。

「君、名前は？」

河相が巡査長に尋ねる。一行は、ビニール・カバーをした靴で、さらにビニールシートの上を歩いた。

「前田秀志巡査長であります」

「状況は？」

「はい。今夜一時二三分、元総理別荘で不審な物音を聴いたとの一〇番通報があり、警視庁オペレーション・センターから出動命令を受けました。たまたまキャンプ場の騒動で出動していた自分が

立ち寄った次第です」

「騒動っていうのは何？」

「キャンプ場にいた酔客同士の喧嘩です。身元は確認してあります」

「……変な話だね。こんな場所で、こんな時間帯に『不審な物音』も無いだろう。ご近所さんがいるならともかく」

と右近が口を挟んだ。

「はい。自分もそう思いました。元総理がいらっしやる時は、いつも事前に本庁から連絡が一本入りますが、今年はまだご利用は一度もありませんでした。……それで、ここに到着してライトを灯して降りようとしたところ、不思議なことに、道路から降りる小径のライトは灯っているし、玄関の引き戸もほんの五センチほど開いておりました。そのため『総理？』と声をかけながら室内に入り、居間の状況をマグライトで確認した次第です」

「じゃあ、部屋の電気は消えていたんだね。外は点いていたのに？」

久嶋が尋ねる。36インチのテレビでは、NHKが点けっぱなしだった。佐世保某所からの記者の生中継がずっと続いている。

「はい。テレビも点いていましたが、部屋の電気は全て消えていました」

土門は、部屋のライトのスイッチを探し、ペンライトの光を当てて丹念に調べた。

「問題はなさそうです。弄った形跡はない。ライトを点けます」

天井のシーリング・ライトが灯ると、紋付き袴姿で、リクライニング・チェアに横たわる老人の遺体が見えた。

檜のテーブルの上に、ビデオカメラが置いてある。久嶋がテレビを消した。

「それで、巡查長。署にはなんて報告を入れた

の？」

「はい。ひとまず現着を無線で報告したのですが、状況が状況でしたので、携帯で係長の自宅に電話して報告しました。折り返し、地域課長から電話が入り『そこを動くな。そして、これは一切他言無用である』と」

「それは素晴らしい！ そうすると、この事態を知っているのは、係長、地域課長と警備課長、署長くらいか」

「はい。無線は一切使いませんでしたので、その数名程かと」

「君、巡查部長の昇任試験とか受けた？」

と河相が唐突な質問をした。

「はい。上司が、俺の立場もあるから受けると。

結果はちよつと……」

「そう？ では、一筆書いておくよ。君はセンスがいい」

「それより、公安にこないか」

と久嶋が、遺体の状況を確認しながら誘った。

「だが、仕事はきついぞ。中でもとりわけきついのが、アイドルの行動確認だ。例えば、人気アイドルがテレビで『平和が大好きですー！』と絶叫するだろう。そうしたら、極左傾向ありで、一週間の行動確認の命令が下る。そこから二四時間のハードな見張りのスタートだ。コンサートに潜入し、鉢巻はちまききを締めてサイリウムを振りながら絶叫コールし、オタクのふりをして握手会あくしゅに潜入。写真週刊誌の尾行をまこうと必死で逃げるアイドルを公安の技術で追跡し、マンションの生ゴミを漁り、枕営業まくらの現場も押さえる。ひたすら辛く、苛酷かこくな任務だ！ だがその情報は、週刊誌記者が持っている政界雀すずめの情報と交換され、いずれ活字になる」

「……久嶋さん、それ国家警察の仕事を誤解させ

ますよ。すまんが巡查長、ちょっと外に出ていくれ」

河相たなかが、畳の上に落ちたピストルを観察しながら言った。

元総理は、銃口を口にくわえて自害したようだ。「この銃は、ルガーかな……」

「いや、旧軍の、いわゆる南部なんぶ十四年式ピストルです」

土門いちべつが一瞥して答えた。

「弾は、どうするんですか？ 昔のものは使えないでしょう」

「東南アジアでは、旧軍時代の銃が未だに使われているたりするので、弾の生産もあると聞きます」

「土門さん、これ、どうです？ 銃創じゅうそうとか見る

機会は滅多にないから、私らにはわからないが……」

土門は、両手の発射残渣ざんさを丹念に調べた。

「特に異常はありません。自殺とみて、間違いないでしょう」

外で、巡査長の携帯の着信音が鳴っていた。

「ここ、携帯が通じるんだ……」

と右近が不思議そうに言った。

「上の駐車場もそうだけど、政界引退後も、それなりに実力があつたお人ですからな」

ビデオを再生すると、NHKの音声と一緒に元総理の遺言ゆいごんが流れ出した。生前の元総理の膝の上には、ピストルが置かれている。

目的を達する過程で、大勢の無垢むくな子供たちを犠牲ぎせいにしたことは慚愧ざんきに堪えない。ひとえに、自分の責任であると、落着いた声で述べていた。

「ビデオの録画もちゃんと止めて、いよいよ自決しようという人間が、テレビは点けたまま部屋のライトだけを消すなんて、あり得ないでしょう。」

——一〇番通報は、どこから？」

右近が久嶋に聞いた。

「新宿歌舞伎町の公衆電話です。こんな戦争の最中のこの時間帯でも、人通りが多い場所です。」

通報元とは別に、他の誰かがここで、元総理の自決を見届けたということでしょうね。それをわれわれに教えるために、わざと部屋の灯りだけ落とした。今頃、その人物は徒歩で山を越えたか、バイクで下の道を走っていったか。付近の監視カメラを調べましょう。残念ながら検問を敷いて引っ掛かるような迂闊うかつな連中だとは思えない」

「しかし、いったい何の不満があるんだ？ 戦後空前の好景気を長期政権で演出し、後を継いだ息子は国会議員に。孫にも恵まれて、党からは長老扱いされていたのに、こんなことで晩節を汚して……わからん爺じいさんだ」

右近がそう言うのと「政治家としての彼の悲願は、憲法改正と核武装だった」と河相が言った。

「若い頃は、党内の青年将校と揶揄やゆされていた」と久嶋が。

「それで、どんなストーリーにするんです？」

「確か、半年ほど前、救急車を呼んだとかでニュースになってましたよね。軽い心臓発作しんぞうを起こしたとかで」

と土門が思い出したように言う。「それだ！」と河相が食いついた。

「別荘にいたところ、見回りの警官が異常を発見し、部屋に上がった時には、すでに事切れていた。死因は心臓発作。発見は夜が明けてからで、事件性なしと判断した警察は公表せず、遺族の判断に任せた——」

「後始末はどうしましょう？」

「公安でやりますよ。今、ワゴンを連ねて向かっているところだ。ご遺体は綺麗きれいにしてからご遺族に届けます。ビデオは、ファイルをコピーした上

で、原本はカメラごと破棄はきします」

「しかし、どう取り繕つくろおうが、後日発表という形にしようが、榛名グループの首謀者しゅぼうしやは、この元総理大臣だったと世間は受け止める。……中国は、それで納得しますか？」

右近が疑問ありげに言った。

「まあ、もう少し下の実働部隊を摘発する必要はあるでしょうな」

久嶋がふと、外を見遣ると、川を挟んだ対岸の稜線りょうせんがうつすらと明るくなろうとしていた。

「なるほど、こうして明るくなってみると、ここも悪くはない。政治家が思索しそくに耽ふけるには良い景色だ。紅葉がさぞかし綺麗でしょうな」。

「ふと思ひ出したけど、この元総理が青年将校呼ばわりされていた頃、その青年将校団の末席にいたのは、国会に当選したばかりの現総理だったよ。うな気がするけれど……。僕らが生まれた頃の話

だから、はっきりとは知らないが」

「仰る通りです。後の都知事を含めて、現総理はその集まりで雑巾掛けをしていたはずですよ」

土門が説明した。現総理とは親しいわけではないが、経歴はよく知っていた。何しろ、前部隊長を唆してこの「サイレント・コア」部隊を立ち上げ、スポンサーの絡繰りを編み出した男だからだ。

「その悲願の達成を確信した上で、自決したわけか。でも憲法改正はともかく、核武装はどうかなあ」

と河相。

「ところで土門さん、戦況はどうなんですか？ NHKは、中国軍が佐世保の軍港と目と鼻の先の場所に上陸したと言っているが……」

久嶋が問いかけてくる。

「ええ。敵は、深夜のスクロールを利用して上陸し

てきました。こちらもそれなりに反撃しましたが、歩兵のほとんどと、戦車をいくらか上陸させたようです。米軍基地まではほんの数キロの所で、われわれは対峙しています。昨日は佐賀での戦車戦で圧勝しましたが、戦争は一進一退ですよ。防衛戦だからと、楽には勝たせてもらえない」

榛名グループと呼ばれるテロ・グループによる中国大使館や、中国機爆破事件に端を発した中国軍による九州への報復攻撃。

これは、五島列島への上陸占拠にはじまり、長崎本土への上陸、熊本八代、鹿児島出水への上陸や空挺作戦と展開していった。

日本側は、自衛隊OB部隊の活躍もあり、八代への上陸部隊や出水への侵攻を阻止していたが、その隙に中国軍は長崎への補給を整え、いよいよ

佐世保への攻略を開始する。

大村湾を挟んで東側ルートは、陸自戦車部隊の活躍で阻止することに成功していたが、中国軍が海軍の援護を得られる西ルートでは、とうとう海峡の横断に成功し、軍港佐世保の目と鼻の先に、歩兵部隊の橋頭堡^{きやうとうほ}を築いていた。

日中の戦争は、七日目に入ろうとしていた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。